

911 ⑧894P ⑧1401P 4592
⑧896P ⑧1219P 1/2末 1,212P

倭人伝を読む199? 終平 1041 赤 894P 海中洲島P 重複 1458 1971-44
⑧895P 巻は170~80年ころという

第十六章 景初三年春
帯方郡からの勸誘

一部重複するが、海中洲島の倭国に立
場から、極東地域の動きを見てみよう。

あるいは、倭国大乱(一四七

一八八頃)が峠を越えたかに見えた終末期

(一七〇一八〇頃)のことであつたらうか。

いや、もしかしたら、この倭国大乱が終焉し

た直後だったのかも知れない。

倭国は、会稽の太守曹氏のもと

倭国の使者が立ち寄つた。

使者を遣わした。そして、水が奇縁となつ

て、倭国は曹氏と誼を結ぶようになった。

(「倭人伝を讀む」森浩一、中公新書、一九

九し二〇三頁)倭人傳の出現 参照 第十章

成務天皇(895)倭人傳の場において既に

年の歳月も、その頃からまた数十年

中は全く、どう流転してゆくか分らない世の

である。

洲 吳 漢 島
又 シウ タウ
如 7
1317
カクフ
678P
タウ

OK 1200 1418 561 1221 1203-46 1003-1/2
 1204 1201 1204 1203-46 1003-1/2
 1204 1201 1204 1203-46 1003-1/2

「世界大事史」の歴史「唐とインド」塚本善隆、中央公論社「の頁」人名
 谷山共「むさし書房」曹操（参考）

一五五年、沛国の譙県（いまの安徽省亳県）

で生まれた曹操は、後漢末の一八四年に

勃発した黄巾の乱討伐で功をあげ、董卓打倒

の軍に加わり、一九六年には献帝を擁立した。

先に述べたように、この頃にはもうすでに

後漢の威力は地に墜ち、王朝は滅亡への急坂

を押しとどめようもなく転がり下ってゆくばかり

りであった。

後漢の朝廷は朝鮮半島の支配にほ

んど関心を示さず、楽浪郡の組織も在地の

豪族が主体となっていた。

そして、後漢時代の朝鮮半島掌握の実質的な根

拠地は、楽浪郡から遼東郡へシフトしていた

ところが、後漢末期の動乱のころ、遼東郡

の統治さえもが事実上放棄されるに至り、

玄菟郡の下級官吏であった公孫度が、遼東郡

太守となつて遼東地域を治めた。（既述）

このように後漢王朝の朝鮮半島に対する支配

機能が、極端なまでに低下してしまつたので

東夷の地に割拠する

韓族や濊族の勢力争いがにわかに活発化した。

丁度そんな時、世の中の動向を見澄ま

東洋銀行 418P
1205/2
22P

東洋銀行 418P
1205/2
22P
1,214P

2100 1203-1/4
1203P
135P

三〇支(第I)
の親の代
南針の紙
花ひき
18ルセ
当座
11を
わた

中国統一の基礎が
一か二の八年十月
曹操は、孫権・劉

一方、献帝を擁した曹操は、群雄に号令し
興して、富国強兵策をおし進めた
後漢最後の天子

米

敏感になり、大陸のあゆみだけ、い動きに
地といた倭国の支配者達の目は、必然的に
今まで以上に、より大きく見開らかるとこ

ていたかのようになり、倭国の女王神功皇后が、突然
朝鮮半島へ出兵して、金・銀・彩色の財宝
の国「新羅国」(百辰韓国)を討ち、狗邪韓国
を切り取ってしまわれた。それは、極東地域の混迷の

(初代)

武成 130か 句は 新 記 する 事 あり
入る こと なる。

1.215P-13

漢 西 印 200km 花 び 55 24P
元 925

封地をおさめる為には、官僚組織が必要

備の連合軍と揚子江中流の赤壁で戦って大敗
 した。ここに天下三分の形勢が生じた。
 敗れて北へかえった曹操は、長安あたりに
 残存していた董卓の余党を平定し、漢中に
 た五斗米道の徒を討伐するなど多忙だったか
 同時に、新しい王朝を樹立する為
 の準備もすすめてい
 った。
 すでに、赤壁の戦い直前の建安十三年（二
 〇八）六月、後漢王朝は機構をあらため、そ
 れまでの三公の官を廃し、新たに丞相をおい
 て最高の官位とした。
 初代の丞相となったのは、
 大丞相と実権を握った曹操に對して、建
 安十七年（二一三）には丞相
 一剣を帯びたまま宮殿へ入ってもよいし
 などの三つの特典が与えられた。
 その翌年（二一三）、曹操は、魏公に封せ
 られた。
 * 尚、魏という国名は、ここに由来する

後漢末に興った民間信仰

城

1205 花 び 55 22

1345

1215^p - 2/3

改訂

991^p

次頁
から

である

と1230^pの政府がでさあか^{かん}った

漢の国内に、後漢と魏の二つ

実質的には、後者の比重が大きなものとなって

11^p った。

建安二十年(二一五)には、曹操の女が皇

小冊子
けん
あ

そごう
せう

むすめ

136^p

534^p

936^p

祥雲
1008P
東洋史
405

五の
都城
1140P

東洋史419曹丕
1008P
1141P
632

後漢書一
建安25(220)10月
花ひらく長安26P

1139P
1141P
1.215P-3/3

布目
潮流

改行
改行

大
54216
何人
建安24年
小林未98P

前頁

后に立てられ、曹氏は外戚となった。

建安二十一年(二一六)、曹操は魏王にすんだ。

まさには、位を人臣を極める。と、いうことは

どおり下、曹操は人臣の列から一段高いところ

へのほったといつてよい。ただ、かみはつ

いに死ぬまで天子の位に即かなかつた。

父が宦官の養子だったから遠慮した。なのであ

ろろか。(「世界の歴史」(4)花ひらく長安)

集英社、二二二四頁。「世界の歴史」(4)唐

とインド、塚本善隆、中央公論社、一〇頁参

照)

*

曹操は、建安二十五年(二二〇)正月庚子

に六十六歳で死んだ。

魏王には、太子の曹芳が

ついでその年の十月、後漢の献帝は、ついに

皇帝の位を曹丕に譲った。曹魏初代の天子

文帝である。

また、十二月に、都が都から洛陽へ遷され

た。

⑤1274^P

花ひらく毛安 31^P (23才)
三日月茶 1-88^P 82 1.216^P

⑤1274^P 三日月(茶) 1-82^P 88^P
後事 云 739^P

⑤1141^P 東洋大行 三日月代 284^P
孫権 429^P ⑤1141^P
⑤1002^P ⑤1008^P

歴史 (4) 花ひらく長安、布目潮派、集英社、三二頁参照
世界史 (I) 世界古典文学全集、筑摩書房、八二頁、八八頁、世界の

曹丕が即位した翌年(二二一)、劉備は漢
 王朝の正統性を主張し、成都で即位した。
 孫権も武昌で吳王の位
 についた。(第十三章、三国鼎立。第十四章
 へ曹魏の洛陽城の項において(既述))

黄初七年(二二六)五月、重体に陥った文
 帝は「ヤツト」後の明帝を立立て、皇太子と
 した。後事を託
 して、文帝は下司馬懿ら四人を召し寄せ、
 仲達

五月十七日、文帝は嘉福殿において山崩御
 した。時に四十歳であった。
 その日に即位した曹魏第二代の皇帝を明帝
 としう。文帝の長子で、二三歳であった。
 ※なお、明帝の母甄后を洛水の女神に
 たとえて歌ったとされ、曹植の「洛神の賦」
 は有名であり、よく知られている。(第十八
 章へ洛神の賦の項において述べたい)

云 1294^P
云 1300^P
云 2322

だがやかて魏国は朝鮮半島の韓族諸国や倭国(邪馬台国)に対して、積極的な懐柔策を打ち出した。

このような魏国の政策は、当面、高句麗への出兵に対応するものであったが、さらに①東方諸民族との連携を通じ、呉国を

側面から圧迫しようとする戦略でもあった。(既述)第十五章へ魏国へ「楽浪」「帯方」を奪回

の項において既述) 魏国は、朝鮮半島南部に割拠する韓族諸国や倭国の国王へ使者を送り、(政策方針)を

と大いに歓迎する事を示したのだった。

もつとも穿った見方をするならば、魏国から自ら楽浪・帯方二郡周回の国々に使節を遣わして、

朝貢の礼をとるようにな

南部地域

①1258 557.12.10 ⑤ 2-307 ⑥ 1,218^P
⑦1216^P

明帝は景初3年正月 ⑧1416^P
元表(和)「ある」この頁1,2行
Eから景初2年までを記す。

けんせい 権勢 ⑨1220^P「品々」

⑩1403-3/3

日本放送出版協会
四頁末の四頁参照

この強い要請を行なった為、ある国は魏国との国交を望み、またある国は後難を恐れ、こぞって使者を洛陽へ派遣し、朝献したのかも知れない。

ここに魏国は、これら臣下の礼をとつた小国玉たちに、印綬・絹織物・采物・その他種々の品を下賜して、魏国の権勢を誇示した。

なお、三國志魏書、東夷伝、韓条に、この記さしてゐる。諸国の臣君は、魏の初年(二三七)に、明帝は、韓の諸長の位号を授けた。

とある。(三國志)(四)世界古典文学全集筑摩書房、三〇三頁参照)

あるいはそれは、魏国が遼東の公孫淵を討伐した二三年八月の数ヶ月後、あるか、その年の末頃のことであつたらうか。

魏国の天子(明帝)の命を受け、帯方の太守劉夏は、使者を倭国の都に遣わして、嚴しく、魏国へ対して、朝貢するがよからうと奨め、その利を説いたように想像される。

いうまでもなく、……もしもこの命に違背するならば、返答をしようものならば、その見

こと

景初3年正月元表

1212 170~180年 「派遣」 頁3行
曹操 155年 1213
895末

「いつまでか」
前頁

1,219 P-1/2

238 赤壁の戦い 208年 30年
30年 岐路595

曹操 (一五五~二二〇) が未だ年若い頃に

返りとして生ずる不利益は計り知れまい。
 ・いや、一國を危うくする可能性すら有ると
 いえよう。
 魏国は今、
 先づの地の呉國にたすむるが、
 魏國は、中華の天下を掌握
 して来た。
 「それにしては魏國は、中華の天下を掌握
 するに出来ぬ」
 「赤壁の戦い(二〇八)以後、もはや三十
 年にもなるといふのに、いまだ統一の動きは
 みられないようだし」
 「とはいつても、三國の世が、そんなにな
 永く続くわけでもあるまいよ」
 「が、三國の國時が、果して何時どの國
 によつて結合されることになるか、
 先の結果など誰にも分かる筈がなかった。
 魏國と対峙できるであろうか。
 魏國へ朝貢の使者
 を送ろう」といふ結論に達した。
 いやあえて言えは、
 魏國へ朝貢の使者
 を送ろう」といふ結論に達した。

H3.9.15(日)⊕

曹芳 魏文侯 51^p 珍物
小まの 歴史 元2345^p

魏文侯 51^p 珍物
珍物 元1469^p
中家(2010)元1639^p

1219^p-2/2

1んちう
慎重 元1158^p
見録 元2122^p

ニト

元2281^p

次頁から

献上品の選定作業に取りかかっていた。
 する珍物を、早速にもあつたと思案した。
 倭人達は、帯方郡を経て、洛陽の都へ持参
 みつくろい致せし
 奥様方のお覚えも目出たいように、慎重にお
 殿を始めとする歴史たる貴人達、およびその
 魏国の天子(明帝)や、帯方郡太守劉夏
 倭国の朝廷は、おおわらわだった。

まさに

今やこの面2行

*

⊕895^p

⊕1212^p

誼を結び、陰ながら曹氏の榮達を望んできた
 倭国が、いまや絶大な力を誇るにいたった。魏
 国へ朝貢することになり、
 て異議をとない者はいなかった。たかも知小な
 照) 第十章「倭人埽」 第十六章の冒頭参
 正面きつ

元394^p

元229^p

ニト

女工の出現 289P
素朴 1315P
斑布 1842P
斑(対比) 2080P

「べき」次頁 5行, 8行 1,220P

武内宿禰 284P
「べき」次頁 2行

ちんぽつえ
珍物 1469P

(口) 斑布は、経糸または緯糸に若干の色糸を用いたもの、木綿のことである。(云辞苑) 斑布(斑布) 参考

(1) 斑布というものは、朝貢品として、藤續法によつて文様を染二匹二丈をもつて朝貢品として、藤續法によつて文様を染

う言つた。昭和五十七年十月十五日発行
「水が良」この素朴な斑布
「魏国の朝廷が今までの過去の朝廷と異なる
「はり今までと同様に、華美なものとは避けるべき
「であらう」
「そいつに、ある粗品の前へ来た時、こ
「う言つた。

「だが、眼前にあるものは、あまりにも艶やか
「過ぎるようであつた。
「魏国の朝廷が今までの過去の朝廷と異なる
「はり今までと同様に、華美なものとは避けるべき
「であらう」
「そいつに、ある粗品の前へ来た時、こ
「う言つた。

「め、ゆきなからこうつぶやくのだつた。
「この品としては、極めて粗末なものほど良い
「目も奪うばかりの豪華な品々を、一つ一つ見定
「め、ゆきなからこうつぶやくのだつた。
「この品としては、極めて粗末なものほど良い
「目も奪うばかりの豪華な品々を、一つ一つ見定

か、殿舎の内には、次から次へと持ち込まれた。
「か、殿舎の内には、次から次へと持ち込まれた。
「か、殿舎の内には、次から次へと持ち込まれた。
「か、殿舎の内には、次から次へと持ち込まれた。

前頁

傷口ならざる着物や工芸品

魏志 50 頁直上 答う」とある。
た 元 P かい 元
元 806 下賜 402

魏志 50 頁直上 答う」とある。
1221 P

たて板 元 1227 15行
木線 2201 建前 1386 絶在 魏志 49 魏志 1842

いた編文様の麻織物
 ともあれ、建前上、
 中国文化の及ばない、遙か僻遠の東南大
 海の中に絶在する東夷の国、
 東夷の国、
 帯方郡、
 ひいては魏国の朝廷の權威がより大きく見え
 るに違いない。中国社
 会がそう望むのであ
 る。そのようにはさ
 びきであらう。武内
 宿禰は考えるのであ
 った。中国社
 会がそう望むのであ
 る。その通りになら
 なければならない。

古代の中国には、夷蛮の国から朝貢があ
 った場合、献上品の品物の名を逐一書きとめてお
 く風習があった。そして、後代において史書を
 編纂する際、貢物及びこれに対する賜与の物等
 を、ことごまかに書き記す。

その時、朝貢の品物が質素であればある
 ほど、下に賜与された品々か
 華麗であればあるほど、威厳とおごりかさ
 をもって記載する。

すなわち、正規に天子に献上される
 表向きの

1014 2209

21 335

である、とする

「女王国の出現」小林行雄、
文英堂、二八九頁参照

ぐあ 云 610
具合 610

倭人伝を説く 69P
①794に合わせる。

①774
②1893-33
③1897

1,222P
④716
⑤716

十分すぎるほど
⑥天つ
⑦改訂

大カシ 1473P
獻 (献)

の朝貢の品が豪華なものであれば、
国の朝廷にとって、具合いか悪いのである。

とはいえ、倭人傳は皆、武内宿禰の言わ
んとするところは、今までの長い経験から分
かっていた。――倭人傳皆が、

例えは、
① 周の時、天下大いに平らぐ。越裳は白雉
を献じ、倭人は苧草を貢ず。論衡曰、儒増篇

② 成王の時、越は常に雉を献じ、倭人は暢
を貢ず。論衡曰、恢国篇

第八章 倭人傳 又史料に見える二つの倭の項において既述
さる正式な朝貢品は、極めて土くさい、粗末な
ものの方が良りのだ、という(こと)を、倭人傳は

充分承知していた。
尚、倭国は、周代のみならず、前漢時代に
も、後漢時代にも、度々朝貢を行なってきたの

相手国を喜ばせて、倭国の実利を得る為の
そうした実績は、極めて豊富なものだった。

昭和三十四年八月二〇日第二四刷発行、十四頁参照
前漢書には、樂浪の海中倭人有り、分かれて百餘國と爲る
歳時を以て來り、獻見すと云うと記されてゐる(山石波文庫四三七〇)

云 491

云 729P

小林 900P
 心付け 1,223P
 2122P
 1517P
 966-3/4 19P
 1234P
 328P
 41の夫
 41の女

諸君はよろしいと思われます」
 せて、帯方郡の郡衙を訪れ、さらに洛陽の都へ
 しょう。手紙に、水らの者たちに贈呈品を運ば
 男生口四人・女生口六人が適当であります
 る生口は、幾人おればよいか
 「それではよろう。して、引き連れてまい
 武内宿禰は、領いた。
 心づけといたし、存じます」
 大殿への... してあちらの方は、洛陽の都
 でお世話にならなければならぬ方々への、
 大きく二つに分けられた。
 大夫難升米は「うやうやしく言った。
 「こちらの方は、こ水からも身近におつき
 あいをお願いしなればならぬ、帯方郡の太
 来たのち、華麗な容姿へ丁重に収められた。
 そして、他の豪華な品々や、珍しい品物は
 貢物は、とさ水で、美しい絹地に幾重にも巻か
 れたのち、華麗な容姿へ丁重に収められた。
 と相槌を打った。
 こうして、斑布二匹二丈、魏国の朝廷への
 難升米ら、大夫達は、

1224^P

「着実」
① 1215²/₃ 7~8⁹ 「こうして」
前頁 3行

わ
て
り
つ
た
。

こ
の
よ
う
に

て

着々として

*

旅
立
ち
の
準
備
が
す
す
め
ら

た
た
え
の
し
ん
び
の
し
ん
び

ウチノハラニ
献上 711
質素 992

いばか
誣し
147

魏志倭人伝
2度目 - 51頁末
3度目 - 53頁末

魏志倭人伝 295
1,225
改行

小林新編 290-292
糸 2292
1683
2293

魏志倭人伝
52

もつともこう記せば、恐らく、

「倭国の文化が高かったはずもないのに、

全くおかしなことを言うものだ」

と、誣しく思われる。とであらう。宋たえは、女王国

出現し、魏志倭人伝には、

「倭国が最初に魏国へ朝貢した時の貢品の

は、極めて質素なものであったが、

二度目および三度目の朝貢の際の献上品は、

意外なほど豪華であった。◇

詳細が書きしるされてゐる。二度目の正始四年

(二四三)の朝貢の時には、倭王(女王卑彌

呼)か、生口(奴婢)・倭錦・絳青縑(絳は

濃い赤色、縑は二本あわせ糸で細かく織つ

た絹、つまり濃い赤と青の二本の糸を撚り合

せた糸でもって細かく織つた絹布か。縑衣

もめん(絹織物の布)・丹(赤色の土)・朱砂(辰砂)・木狛(狛の誤り)

か、弓の中ほどの左手でにぎる所、短弓とその

矢を上献したという。最後の朝貢の時には、卑彌呼の宗

子として下

『魏志倭人伝』中の

魏志倭傳 50
⑤ 1221 1行
出惜 1370
和やか 883

文言
2207
非

魏志倭傳 6行
P-2
高貴次項
珍 1466
めすくま

魏志倭傳 53
珍 2172

魏志倭傳 53
魏志倭傳 303

女 壹與 (宋本太平御覽は臺舉と記す) か、
 男女生口三十人を献上し、白珠 (眞珠) 五。
 〇〇孔 (個) 青大勾珠二枚。異文雜錦 (異は「め
 ずらししい」
 雜は「色がまじる」
 か「い」... っまり中国人にとつて、
 様の形容しかた「錦」という意味か」二十匹を
 貢した、という。 (三国志 II) 世界古典文学全集、筑摩書房
 ■ 倭国から魏国へ貢物として差し出されたこ
 れらの珍稀有品々の名から推し測つてみると
 き、倭国の文化が低かつたとは、とうてい考
 えにくい。
 三〇八頁、
 とすれば、
 作る技術等があつたというのに、
 重要な最初の魏国への朝貢の際、
 国は出し惜しみして絹織物などの高級
 品を全く持参せず、ささやかに魏志倭人
 伝の文言通り、
 「男生口四人。女生口六人。斑布二匹。二

である
 魏志倭傳 54 2行
 東洋史 445
 朝臣 左 田八郎

出惜 10行

素朴 1315

このたね 1227

契 1423 特産(物)元 1593
絹本(楷) 1226 特にその地に奉ること

献上ならぬ、
とらうのたろが、
は不可。

丈^シ 洛陽^の
 のみしか都へ持って(庫水て)行かなかつた
 と、いうのだらうか。
 川や、とてもそうとは思えない。
 一^ハ 国の王が魏^の天子に朝貢して同盟の
 契^りを結ぼうという時、他に珍しくて貴重
 な特産品が全く無いものならば、いざ知らず、
 錦^などの特上品を出ししぶり、木綿^あ
 るいは麻^で出来ている斑布^{二匹}二丈^{程度}の粗
 末^なものしか持参しなかつた。
 などとは、あまりにも不自然きゆまりなり。
 たぶん、周^や漢^の時代には、中国の朝
 廷^の方が質素な貢物を望んだのであろう。
 このような背景があつたから、倭国は、そ
 の慣例に従い、あえて素朴で見ばえのいな
 い斑布^{二匹}二丈^四を献上品として選んだも
 のとであらう、と思われぬ。
 いかし、魏志倭人伝の文面には記さず
 いないが、男生口四人・女生口六人の計十人
 には、持てるだけの絹織物・白珠(眞珠)な

持参しこの夜10時
魏志倭人伝 50 巻 献する、反献す

前頁 29行

→ 厚稿下書き 2冊目の末頁。

H30(2018)3.3(用)~3.7(4回)

H30(2018)12.22(出)~12.23(3回)

令和(2019)5.22(出)~5.24(3回)
令和2(2020)9.14(出)~9.2(5回)

1/2 1/3
1/2 1/3

1.228^P

「見は先」顔 15行
顔 14行
顔 13行
顔 12行
顔 11行
顔 10行
顔 9行
顔 8行
顔 7行
顔 6行
顔 5行
顔 4行
顔 3行
顔 2行
顔 1行

韓族諸国
1217-2/2 中央

高貴 731^P

どの高貴な品々を持たせて、魏国の貴人達
 への手土産とした。その際、生口および斑布が恭しく
 献上されたのであろう。と想像される。
 ところが、倭国以外の国々から魏の朝廷へ差
 し出された朝貢品は、かなり立派なものだっ
 たのかも知れない。しかも魏国は、それを外
 めるでもなく受け取ったように想像される。
 こうしたわけで、二度目の朝貢の時から
 倭国ならでは、多数の品々が魏の朝廷に献上さ
 れたのであろうと推察される。

豪華な

*

10年と分る

華元朝廷と

530

1人889 1158
 1234 09, 29
 1176 57k-299
 1365 65
 1,229
 966 3/4
 1223 257
 1234
 508 781
 665 1628
 1052

明帝崩御

即位の急報

新帝(曹芳)

倭国では、帯方郡を経て洛陽へ赴く使者の
 旅仕度(りやうじゆう)に追わ(お)れていった。

旅中(りやうちゆう)や朝貢(ちゆうきゆう)に必要な(ひつよう)なこまごました物を揃(そろ)えたり、

都(みやこ)の守衛(しゆゑい)・取り次(とりつぎ)ぎの官吏(くわんり)などに、ちよつとし
 た便宜(べんい)をはか(か)つてもら(もら)う為(ため)の心付(こころづ)け等々(とうとう)を用(よう)

意(い)した(し)たり、と何(なに)かと多忙(たぼう)であ(あ)つた。

「難升米」

ここに遣魏使(けんゑいし)として誰(だれ)を派遣(はつかん)すべきか(か)が協(きやう)

議(ぎ)さ(さ)れ、正使(せいし)として「難升米(なんしやうまい)と

が任命(にんめい)され(さ)れること(こと)にな(な)つた。

さて、箕子(きし)支配(しはい)下(か)にあ(あ)つた時代(じだい)に、倭人(わじん)達(たち)

た箕子(きし)達(たち)の言葉(ことば)を巧(たくみ)に操(あやつ)るよう(よう)にな(な)つた。

ところで、それ(それ)でも(でも)やはり(やはり)この当(とう)

時の貴人(きじん)達(たち)は、江南(くわんなん)の言葉(ことば)を日常語(じやうじゆ)として喋(しゃべ)

り、漢字(かんじ)へ吳音(ごおん)として(して)の漢字(かんじ)を自由(じゆう)に用(もち)い

ていた(いた)よ(よ)うに思(おも)われ(れ)る。

とはい(はい)え、中国(ちゆうごく)の南(なん)と北(きた)とでは随分(ずいぶん)と地(ち)域(い)

ルビ 323 P 167-3/4, 169-44
与辨半島 = 丹後半 高野山 1230-1/2

内藤虎次郎 現代の人名 2000 1445 P 1/2
おてきま 1801 1801
かむく 448 P
華北 448 P
紀元 364-374 末 448 P

それでは、誰か適任者がいるだろうか。
 『都市牛利』(重仁朝前元と後元)末に後漢の都(および)常世
 さんなとき思い浮んだ人物は、
 国へ使わした田道間守であつたらうか。
 伊都国王のもとへ使者が遣わさぬ
 華北(魏国)の言葉を心得てゐる者が、求め
 られた。
 こうして、都市牛利が、副使兼通事と
 して、抜擢されたように想像される。
 (参考)内藤虎次郎博士は、都市を出る石とみて
 「リブル」の略として、また牛利は心の意で出石
 心すなわち都市牛利という人名なのだろうという。
 また伊佐我命に關係あるとして出雲の都
 我利神社の都我利ではなにかと疑つてゐる。
 (「岩波文庫」四三七〇、五一頁参照) 三頁末尾
 (ロ) また、播磨国風土記に、穴禾郡御方の里奈で
 は、お石の~~と~~を「伊都志」と表記してゐる。
 (ハ) すてに述べたように、筑紫の糸島半島、
 伊都国あたりに地形的に似てゐる半島、
 基郡あたりを、伊都に似る半島、丹後半
 島、基郡あたりを、伊都に似る半島、丹後半

前 105

①1233^{p-2}/_{19頁} ~~抄本を知らぬ~~ 1230^{p-2}/_{19頁} 都利牛利^{p-3}/_{124頁} ちお 御察 839^p ①1626^{p-1}/₂ ②765^{p-1}/_{2-3/4} ③846^{p-1}/₂ ④169^{p-4}/₄
 ⑤1322 ⑥1244^{p-3}/₃ 同文①1244^{p-3}/₃

なんて「出石」(「伊都志」と称したのかも
 知らない。(第八章「天日槍伝説」の項参照)
~~定かでないか、この物語では、~~
~~伊都国王の~~
 息子^{息子} である。と解したい。
 即ち、牛利と御察(貴人の息子の)
 御敬語)とを結びつけて考えてみる。
 (「広辞苑」へ御察参照)
 *もつとも、牛利は、伊都国王の祖
 先「天日槍」(扶余系殷民)の言葉に由来し
 ていのではないかならうかとも思われるが、確
 かめ得ない。

*

角等
 風上記 323 此に前

「定かでない」20頁 472
357

のか平知味る

1210°
1269°

1,231°

2962°

290°

生口

難升米らが魏国の朝廷へ献上する為

れていった。生口とは

うな者達だったのだろうか。

④ これも詳らかでないが

へ倭国の宮廷につかえ、貴人達と交わるこ

とにより、少なくなるとも江南の中国語が

自在に喋水、礼儀作法を身につけていて、

トかも従順な者らが選ばれたことである

う

と想像される。

⑤ あるいは、殷の時代に華北に住んでいた扶余系殷民の子孫達

だったのかも知れない。

■ その人な二人なで返して、いる倭国に

ある日、火急の報が届いた。洛陽に放つ

ていた。謀者からの知らせがあった。

景初三年(二三九)一月一日に、魏国の

天子(明帝・三六歳)が崩じ、曹操の次男

1553°

1,240°

小林 249P 表 1959
 1.232P
 小林 74P
 主君の命で 4月 使臣 使いに行く者 (あかひにわく) あたると 42
 574P 仰天 574P 仰天 574P 仰天 574P 仰天 574P
 1218P 1218P 1218P 1218P

三訂本(第) 1-114P
 1323P 1555P
 1210P 69P
 小林 371P
 三訂本 110P
 三訂本 114P 芥川 王
 1210P 中央
 1209P 18P
 三訂本(第) 1-114P 上
 114P
 三訂本 I- 114P
 42P の出現 143P 149P 289P
 下をたに 12

ちで領りた
 新報なるに吉報
 その は 帯方郡太守劉夏 加遣わした使者
 摩をもち 仰天 させずに 魏国への朝貢のこと、しかと
 申し伝えましたぞ。心して御判断なさるかよ
 と言ひ残すと
 ふたと帰国の途についた。

と難弁米が言った。
 都市牛利は、神妙な面持
 にありなうたようだな
 新帝の御即位を祝つての朝貢ということ
 その小は思ひがけないう突然の出来事だった
 王国の出現 小林行雄、文英堂、二八八頁
 志物語 寺尾善雄、光風社、二二一頁。七女
 全集、筑摩書房、一一〇、一一四頁。七三国
 というのである。(七三国志 (I) 世界古典文学
 曹彰の孫にあたる曹芳 (未だ八歳の香王) が同日
 即位した

① 1250^{p-1/2}
~~1249~~ 同
 小林 490

記載
 20頁 59
 1,233^{p-1/2} ⑤ 5081^p 1699
 ④ 98^{p-1/3}
 ④ 1798^{p-2/3}

夕什ル

魏志倭人伝
 に見え倭国からの使者達

少く早すぎる感もあるが引き続き、魏志倭人伝に記

載されていり、倭国から魏国へ遣わされた使
 者等、についで、予め、思うところを

述べておきたり、
 米

大夫難升米
 大夫難斗米

① 魏志倭人伝には、大夫難升米

② 日本書紀 神功皇后摂政三十九年条には

と記されている。

この日 大夫難升米、大夫難斗米、
 考察してみたい。

大夫の語は、すでに崇神紀からしばし

は現われていいるが、初期のそれは、すべて
 朝廷の重臣あるいは有力者という一般的な意

1048

2251

「からの合わせておきたい。」

「とほはれ」
 ①1229P
 講社神社
 紀上328P
 いうまでもなく

1.233P - 2/2

かきたい 政治の善悪を論じ
 小村 909P 諫議大夫 天子をいよめる官 紀下550
 ①1250P
 ②1250P

味で用いられており、一定の政治的地位を表
 わすものではないように見受けられる。(「日本書紀

(F) 日本古典文学大系、岩波書店、五五〇頁補
 注181-2参照) (中国史で「周初から秦による統一までの時代

なお、中国の「おける」日大夫は「先秦時代
 には卿と士との間に位した諸侯の臣の一階級
 だったか、漢代では論議をつかさどる官で、

大中大夫・中大夫・諫大夫がある。一般に大
 臣をいう。(「岩波文庫」四三七〇、四四頁
 「公孫苑」へ「先秦」へ「先秦時代」参照)

恐らく、中国の「大夫」の呼称が倭国へ導
 入されたのであろうか、それが「周初」
 漢代の「何時だったのか」また「どのような役職を指し

ていたのか」といった詳細については分らないで
 さて、伴哀紀九年条には「四人の大夫の名
 が記されてゐる。

中臣鳥賊津連・大三輪大友主君・物部
 昨連・大伴武以連」
 の四の名である。
 のかどうかについては知るすべからぬ

勿論、この四人の他にも大夫がいた
 大夫難升米 (「大夫難斗米」)

次頁6行もルビを

紀561

決定的な証拠は

1.234^P

④96-3/4
難升米(2.22)

米 = mY 漢和 741^P
彌 = mI " 366^P
前頁199

831^P手=手はみ
何もないこと

とく………記紀中の誰かとき結びつけて考え
る場合には、大いに慎重でなければならぬ。
 ■だが、慎重のあまり手をこまねいているばかりでは、何の進展もみ
 ■そこで、異論もあろうが、あえてこの物語に
 おいては、
 △中臣 難斗米 (難升米) 〓
 なのだろうと仮定し、話を進めてゆきたい。
 △大夫 中臣 鳥賊 津連 加
 (難升米) であつたらう。〓
 と考えてみたい。(第十二章 伊香刀美) 〓
 項において既述) *
 ↑↑↑では、中臣の古代の呼び名が△難斗米
 もしくはその水に近しい音だったといえる根拠が
 はたして有るだろうか。
 △先におもひ何はともあれ、中臣の語意につい
 て見ておこえ、かなり難解ながら、(二)の意
 (一) 中臣系図の引く延喜本系に「さう読されて
 案依去天平宝字五年撰氏族志所宣勅造

エ 82
カナン 113^P

エ 1552

小林 442
小林 548

カナン 818^P

カナン 596^P
小林 306

カナン 262^P
カナン 2218

速修 2033
由 238 119

改訂

2398

命かたないか

1,235P

2033

三〇 大也 毎二 〇う
「鋒・榊・槍と書き」
〇1242 察ッせしむる

小村 823P
かほう

木村 513
小林 513
1651

クワソソ かん 1548

皇孫 天子の御孫
記上 561
22103

466
執

962-2/3
1129

かん 800

98
59

96
226

1987

かん 1548

かん 800

651

所進本系帳云、高天原初而、皇神之御中皇
 御孫之御中執持、伊賀志榊不傾、本末中良布
 留人、称之御中臣者、
 (2) また、台記別記の引く中臣寿詞に
 本末不傾、茂槍乃中執持氏奉仕留中臣
 とある。「日本書紀」(上)岩波書店、五六頁、補注一七九
 察すると「中臣」は——その昔「中執持」
 と、いう意味だったように思われるが、
 「下」では、この「中執持」の「中」を「古」の
 人々は何と呼んでいたのだろうか。
 「遥かな大昔、弥生時代当時の正確な発音までは分から
 ないが、「倭人」が「中執持」と言った際、
 中国人が「難斗米」又は「難升米」と聞き取っ
 たとしてもおかしくないような、そんな呼び
 方をしていた。通リ、古代の人々の「ナ
 トミ」という言葉の中には、「中執持」とい
 う意味合いが込められていた。
 のであろう。

偽名版 617⁺
石2-73⁺ 神功紀上 334⁺

335⁺ なのかけ
334⁺ 難河

1,236⁺

天武
5081⁺
天武
5081⁺

紀下108⁺
紀下102⁺ 天皇名
紀下132⁺ 比有

中^{なか}の^の意味^いが含ま^まれ^れた^たという^{いう}。
 (1) 淳中倉太珠敷天皇 (敏達天皇) 天淳中
 原言^{はら}脚^{あし}真人^{まこと}天皇 (天武天皇) の又^{また}ナは、起^{おこ}源的^{げん}
 に^に与^よ瓊^にの^の凸^こと^と沼^{ぬま}中^{なか}凸^ことの双^{そう}方^{ほう}の^の意^い味^みが^があ^ある^る。
 (口) そして、淳中^{ぬま}底^{そこ}仲^{なかつ}津^つ媛^{ひめ}命^{のみこと}・淳浪^{ぬな}田^たの^の場^ば合^あは、^は与^よ沼^に
 の^の中^{なか}凸^こと^とい^いう^う意^い味^みに^に解^{かい}さ^され^れる^る。
 (ハ) 凸^こナ^な凸^こは^は号^{ごう}水^{すい}だ^だけ^けで^で凸^こ中^{なか}凸^この^の意^い味^みを^を持^もつ^つ語^ご
 で、凸^こナ^な凸^この^の凸^こカ^か凸^こは、ス^すミ^みカ^か・ア^あリ^りカ^かの^の
 凸^こカ^か (処^{ところ}) 凸^こにあ^あたり、後^{のち}に加^くわ^わつた^た単^{たん}語^ごで
 ある^る。
 という^{いう}の^ので^であ^ある^る。(「日本書紀」(F) 日本古典文学
 大系、岩波書店、一〇八頁注五参照)
 ② また、魏志倭人伝^{魏志倭人伝}凸^こが書^かか^かれた^た頃^{ころ}、「ナ
 (または「又^{また}」) と呼^よば^ばれ^れた^たの^のに、後^{のち}年^{ねん}
 「なか」に^に変^かわ^わった^たと思^おい^いわ^われる^る例^{れい}が^があ^ある^る。
 魏志倭人伝^{魏志倭人伝}に^に「奴^な国^{こくに}」^{な(ぬ)こくに}仲^{なかつ}哀^{あい}紀^き八^{はち}年^{ねん}条^{じょう}に^に「難^{なん}
 縣^{あかた}」^{あかた}神功^{しんこう}摄^{せつ}政^{せい}前^{ぜん}紀^きに^に「難^{なん}河^か」^{なんのかわ}と^とあ^ある^るの^のに、
 式^{しき}神^{しん}名^な帳^{ちやう} (武^ぶ田^た本^{ほん}) 等^らにも^も「那^な珂^か郡^{ぐん}」^{な(な)か}と^とあ^ある^る (和^わ名^な類^{るい}
 〇 つまり、奴^な国^{こくに}の^の「ナ」^なには^はそ^そも^もそ^そも「中^{なか}」
 の^の意^い味^みが^が含^まま^まれ^れた^たので、
 聚抄^{じゅうせう}郷^{きやう}名^な考^{かう}證^{てい}「池^{いけ}邊^へ彌^{わたる}、六^む七^{しち}頁^{えつ}参^{さん}照^{しょう}」
 273 7-29 21

聚抄郷名考證「池邊彌、六七頁参照」

紀上326⁺5行

紀下382⁺ 比有?

「振名」小町 300
ルビ 2338
ふりがな用活字 1,238

越後水 1235 1999
越到水 前頁中央

「例」 前頁6行

と歌われていゝる。

このような諸例を総合し、考え合わせてみる

とき、
 (1) 倭人が「難斗米」と言うのを聞いた中国人は、
 「難斗米」と聞き取ったもののは、
 「難斗米」と書きしるしたのではなからうか？
 (2) 中国のおおもとの原本には本来「陳寿」
 「難斗米」と記載されていたのに、
 「登」を「升」に書きかえて、「難斗米」と記述したのだからか？

などと想像されるが、
 「三国志」の撰者

「難斗米」もしくは「難斗米」

と、「振り仮名」をつけて書き綴つてゆくことにしよう。

1236 1499 例

ぶんしん 文献

事例 例

合 合

諸例

(2)

天つき
改行

地名集 1131 下末
であったら

改行

1,239P

為五回

ひんゆく 1909P
不快に思ふ

言のすもがな 162P
識者 951P 知識・見識を持つ人

の御霊を祭ることとなつたように推察される。

さて、時が流れて、畿内に中臣氏の祖先神

三郎、名著出版、一三三頁へ中富へ参照

今鹿本郡中富村・千田村・米野岳村等の総

富山という旧庄名が肥後国鹿本郡にあつた

富山と旧庄名が肥後国鹿本郡にあつた

富山と旧庄名が肥後国鹿本郡にあつた

あえず、このように仮定してみよう

突拍子もない感が強いもの

まさかやんな言ひ伝えなどあるわけがな

参照

と思われ、第 8 回へ倭国の行政区画図(想像)

たのであろう

山鹿・および阿蘇を中心とする一帯だ

中臣氏の所領は、肥後国の菊池

繁茂を買い争うだが

あえて更に

このようなことを記せば

識者から大いに

(2)

ケ-20 20x20

握の「が」20反行

482

「たい」前14行

「と」前14行

天つき
改行

日本社 387P 阿倍山 (阿部山とゆふ) 1,240P
更に前頁 5P 表のM10 改行
新大(1)/42

地名辞 969P
11062

時辰寺大観 310P
まき 改行
1315

えら小たからであらう。

* 春日か、菊池・山鹿あたり相当すると考

殿をその山麓へ遷した。

春日の御笠山山頂に遷座し、やがて勅に依り社

そののち飛鳥京の東方の阿倍山の山上を経て、

青山町阿保とまう(大村神社由緒参題)に遷幸勧請し、

國鹿島の健御賀豆智命(建御雷神)を

中臣氏の子孫達は、常陸

外輪山西面の山々に見立てるようになった。

たものと思われ。(既述)

山塊に擬え、そして阿蘇外輪山の連峰を田身身嶺

(多武峰)から三輪山・春日山へかけての山

山麓の現在地へ移されたといふ。

名著刊行会(枚岡神社)参照

一かしやがて人々は、熊山(金峰山の山塊)に生駒山の

津獄凸であつたらうか。この地に、中臣氏の

祖廟である枚岡神社が創建されたのだ。

もつともその後、枚岡神社の社殿は、神津

る所(生駒山塊西北部)枚岡市の小丘に神

たのは阿蘇外輪山西北部に位置的に相当す

中臣氏の祖神を祭るところとして選ばれ

類似の活字は、
③3501- $\frac{1}{2}$ おおて
はべる。
版 菊池郡誌 374P
1.241P

日本の歴史工 読売 39P
日本各地にお話だとうり

ニ
784P
1020P
479P
三 茲に
1020P
下
前 3行 枚 同 市

と名乗ったのであろう
③1666

友い香取神を下総より赤天え子八根命
 および比賣神（第二代神功皇后であろう）を
 河内の枚岡より、春日に遷幸勧請して、茲に
 四殿の結構が成ったのだという。（日本社
 寺大観）名著刊行会へ枚岡神社春日神社参照
 思相がある。神を他所へ遷す神の御霊は元の社に於るとす
 前記の通り
 肥後国菊池・山鹿一帯 富豪の者が加用
 明帝の時、滅んでしまった
 とりう米原長者の伝説がある（菊池郡誌）名
 著出版「三七四頁参照」
 菊池郡を根拠地とする中臣氏（本家筋）
 者が禁裡に奏して長者號を賜わり、米原長
 者號と號し、権勢を誇っていたが、
 用明帝の時、至つて滅んでしまった
 という歴史を背景とした伝説なのかも知れない
 すなわち、
 直系の本家筋
 加下
 米原長者

紀上138P
③1951

経津主神

③1020

天兒屋命

おろ高 1179 郡 1882
1990 1990
1990 1990

1235

新や再校中巻195

菊池郡史

半原長巻 3501-3
統日本紀5 光木の2 更に前項5行

1.242 1/3

4535 亀の城 268

続日本紀1-11

2209 HV

などと想像される。(第六十七章へ「米原長
 者」の伝説の項において詳述)
 〔また、肥後国の菊池には、建置年代不詳な
 から、鞠智城が築かれたようであり、
 文武二年(六九八)に修理されたのだった。
 日 続日本紀に文武二年(五月二十三日)
 「五月二十五日、大宰府を以て大野・基肆
 ・鞠智の三城を繕治はしむ」
 戦略的に全意味を無にすると思える肥後国内陸部の菊池盆地に「大野・基肆」の鞠智城を築城したのたろうか。

だがその後、
 長の間、かえり見られ、
 聖徳太子が金人の夢告によつて得られた崇
 高な理想を實現化するためには、西域の肥
 後国はあくまでも僻遠の鄙の地でなければ
 ならなかつたからであろう。
 とはいえ、中臣氏の子孫である藤原氏と
 菊池にはやはり、忘れぬことの出来
 ない心の故郷だったのでないだろうか。

関白藤原道隆の曾孫、藤原則隆は、後三條

とも四代の後裔ともいう

一筆
後朱雀
後三条
白河
堀河

西科事 2-313
(表せ) 「こころ」
4298
5738-1/3

1242-2/3
5723

後朱雀
皇室大御料 230
2801
弘仁元年 154
南原盆地 北入川の源 260

日本社 886
能本の伝説 82
平山
田川
相良

相良の
 熊本の鹿本町の北方、山中(菊池川の支流内
 田川の上流)には、相良観音で有名な相良寺。吾
 平山(醫王院)がある。この相良寺は、平安朝
 初期の弘仁年中(八一〇-八二四)に最澄が開
 創したと伝え、比叡山延暦寺の末寺である。
 尚、淀川上流域(京都盆地)の東北方に比叡山
 の上流域(菊池盆地)の東北方に相良寺がある
 相良寺の本尊は千手観音は、後朱雀天皇
 (一条天皇の第三皇子。一〇〇九-一〇四五
 在位一〇三六-一〇四五)の皇后がお産のお
 り、この観音に祈願して無事に皇子を御出産
 さされたので、ゆ水以来安産と子授けの靈験あ
 らたかたな観音様として広く知られることにな
 り、祈願のための参拝客が絶えなない。
 後朱雀天皇の母は藤原彰子(藤
 原道長の長女)であり、この頃は藤原氏全盛
 の時代であった。藤原氏のこの繁栄を思うと
 つけても、

比叡山
鹿本
田川
相良
吾
山
延暦寺
末寺
平安朝
最澄
開創
弘仁
年中
比叡山
延暦寺
末寺
平安朝
最澄
開創

486
後朱雀天皇か？
後朱雀天皇の御
田川
相良
吾
山
延暦寺
末寺
平安朝
最澄
開創

H29 (2017) 11.6 ~ 10 (1回)
 H30 (2018) 11.29 ~ 11.30 (2回)
 H9.5.11(水) 日本経済新聞
 → H1.19.3(日)世

1242P-3/3
 日本経済新聞 880
 紀下210
 紀下185末

たの志1660P
 懐かむ 蘇我の本居 紀下210
 紀下1868P

「熊本の伝説」
 一 角川書店、八二頁参照

昔、中国の官が持つてきたと語りつがれている。
 揚子江流域にある油麻藤と同種であり、
 古木がある。学名マメ科クスノキ属の一種
 ラトビカズラ (国指定特別天然記念物) の
 じゅうでここーか所
 相良寺には、日本

御陵なのではなからうか。(第1表参照)
 神武天皇(継体天皇)の父あるいは祖父の
 には、「日向の吾平山上陵」と記されている。

相良寺の西方には、
 吾平山陵がある。神代紀末尾
 相良寺の千手観音
 無事に皇子を御出産した
 相良寺の千手観音
 相良寺の千手観音
 相良寺の千手観音

藤原氏の流水をくむ者達は、密やかなが
 中臣氏のもととの本居の地である
 菊池を懐かんだ
 ように想察される。

世木精之

天皇の御子をおごった。 菊池家と「小町」150に
 天正改行 1.243
 菊池A3代29 17武政 心かちめ
 深川「小町」153
 菊池郡史173 菊池A3代182
 菊池郡に在る
 菊池郡史173 菊池A3代182
 菊池郡に在る

天皇の延久二年（一〇七〇）に肥後国菊池郡
 下向して、深川村に居住し、氏を菊池と称
 したのだった。
 この深川に築かれた城を曰菊ノ城と
 子孫世々に此に居り、
 今この隈府に在所を定めたと
 郡史「名著出版、一七三頁。」「帝国地名辞典
 太田為三郎、名著出版へ菊池郡へ菊ノ城趾
 へ深川へ。」「菊池氏三代へ杉本尚雄
 へハ二頁、二九一頁（系図）参照）
 南北朝期の史料によれば
 他代からは菊池と呼ばれたが、同氏内部
 では惣領家も庶子家も曰藤原氏と自稱した
 という。へ「菊池氏三代へ杉本尚雄、吉川弘
 文館、二頁参照）

*

版 冊 1100 525P
2950-1/2 あらびき 3行

1.244

1798-1/6 1799
「あはれた」の良12行

1798-1/6 1998
和紙 284P

1798-1/6 1799

多数集中している



菊池川流域には三角文様をもつ装飾古墳が

円等を交えないうち

文だけの文様は、あるいは祭祀を司る中臣氏

の代を示していたのたのたのたではなからうか

中臣氏は、もいかうたら、三角文様

をほどこした帽子をかぶり、首に玉飾りをつ

け、両手をつりてひざまずき、大王(倭王)

および神々に奉仕していたのがも知れない。

①中臣氏(藤原氏)の氏神として崇信深、常陸

國鹿島神社にほど近い、茨城県鹿島郡鉾田町

の古墳

大字青柳から出土した埴輪、両手をついてひざまず

く男は二段に三角文様をあしらった丹塗

りの帽子をかぶり、首に玉飾りをつけ、両手

を前につけて跪坐する人物像である。(写真図版211)

もしかしたら

へこの埴輪は、中臣氏が神につかえる敬虔

な様子も描写しているのたはなだらうか

なびと想像される。(第五十章(装飾古墳の模様)の項において詳述

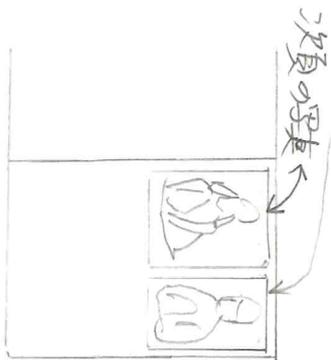
またこの他に、鹿の頭をかたどった冠帽をつ

けたものなどがある。(写真図版212 参照)

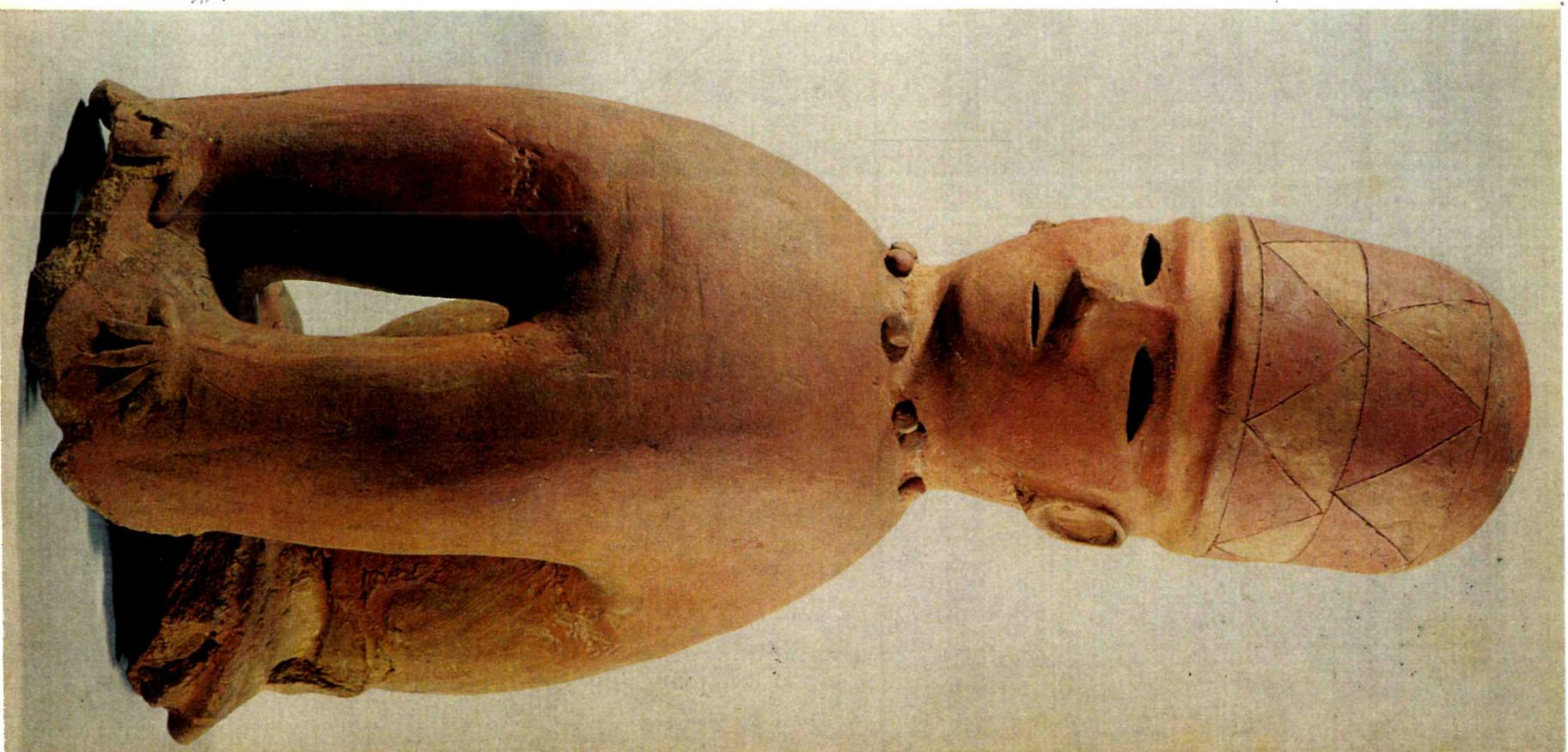
茨城県西茨城郡岩瀬町青木出土

・カラー

→ 右側の右上に、右が「
上」へ大きくはみ出た
掲載下さい。



1,245^p



2949^p
2949^p

490

中心57x44
1300g

『埴輪』小林行雄、平凡社

昭和49年8月5日発行

10参照

中心57x44

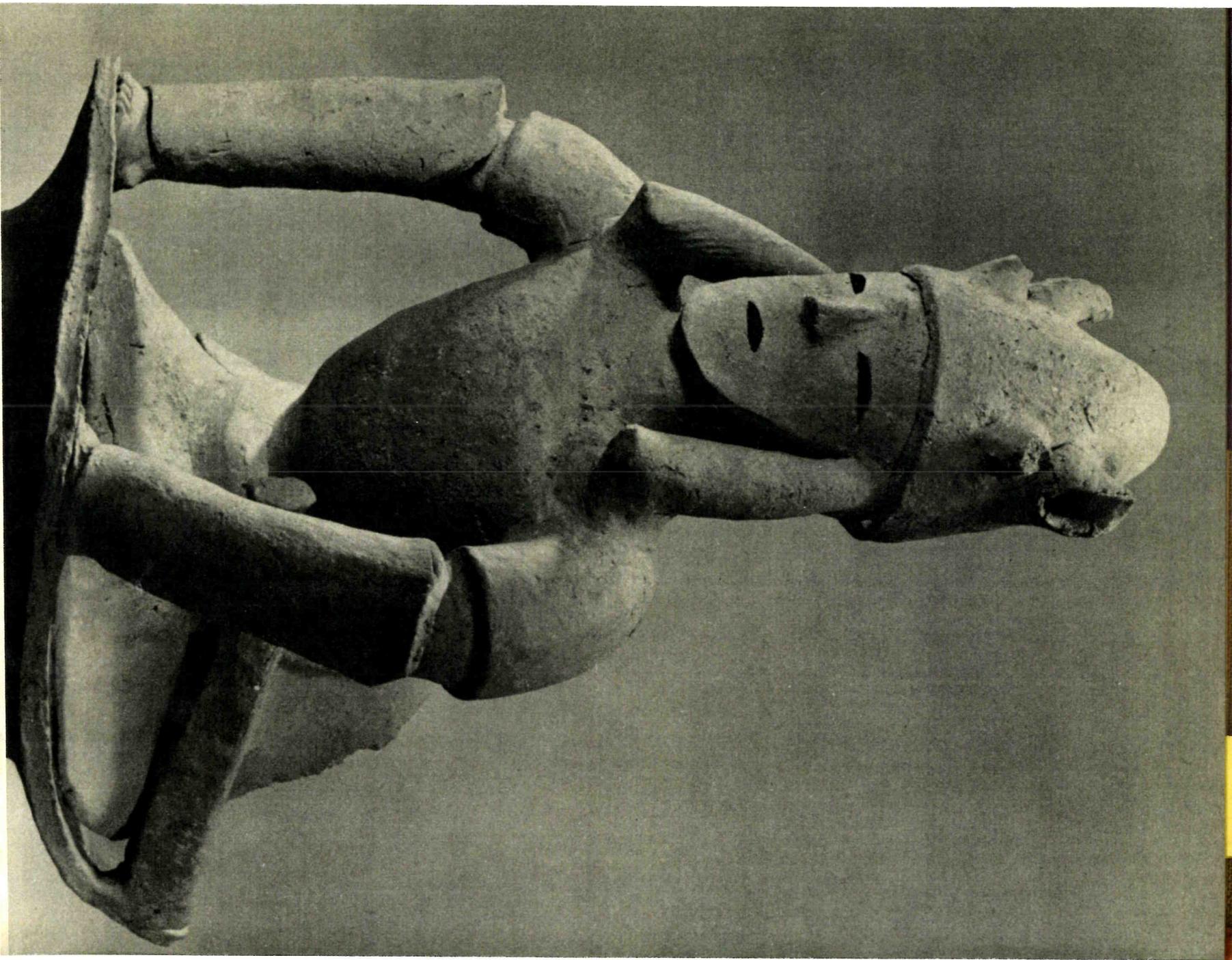
1400g

写真図版211 (157)
両手を引いて、ひざまずく男(重文)

6世紀 茨城県鹿嶋郡銚田町不二内古墳出土 高さ53.0cm

・右肩の左上に、左おまび
上り大まきへおまび出で揚敷
Fz
ニ。

1,246^P



491^P

1309 14 1409 伊真図版 212 両手を引いて、ハザマオウ<男

7世紀 茨城県西茨城郡岩瀬町青木出土 高さ55.5cm

『埴輪』小林行雄、平社、昭和49年8月5日発行、32参照

491^P

経上 3512^P 類文 1249^P (次項 2枚) 同反 1230^P 1.247^P

新井 三角文様 2949^P - 1/3 新井 284^P

懸命に見据えた表現の顔で、何か口上を述べ
 てりるさまに見える。『週刊朝日百科』
 文・弥生・古墳時代の美術、朝日新聞社、十
 一―八〇頁。『埴輪』小林行雄、平凡社、色
 10 (ひがますく男、六世紀、茨城県鹿島郡鉾
 田町不二内古墳出土、高さ五三・〇センチ) 図
 32 (ひがますく男、七世紀、茨城県西茨城郡
 岩瀬町青木出土、高さ五五・五センチ) 参照
 三角文様については、第五十章へ装飾古墳
 の模様 Ⅱ 三角文 において述べたい

次使都市牛利

都市牛利は、定かでないものぐとりあえず
 伊都国王の血筋を引く御寮口息子らのこ
 とであろう

と解してみたい (既述)

魏志倭人伝中に「牛利」の名が四度記さ
 れている。

(1) 景初二年 (実は三年) 条に「次使都市牛利」
 (2) 同年条に「牛利」 (三度)
 の記載がある。

(*)

正面を一生

742^P

考えてみたい 板 16行

1,248^P
尾「たけらちのたけね」

果行成番 53^P 104^P 尾文 52^P 尾の女王(は)、大夫英雄等も遣わし郡に語り
①2164^P

カン 906^P
大カ 1042^P
シ 1412^P
ウカ 2144^P
ヨナ

【戴斯鳥越】

↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑ 魏志倭人伝に一度だけみえ

る 戴斯鳥越を、記紀中の誰かに当てはめ

て考えることが出得るだろうか。

魏志倭人伝の正始八年(二四七)条に

「倭へは」戴斯鳥越等を遣わして郡(帯)

郡に詣り、云々

と記され、内藤博士は、戴が戴の誤りとす水は

戴斯鳥越は、武内の音に近しい

という。岩波文庫 四三七〇、五三頁

あるいは、武内宿禰の名と年と位とを、親

から子、子から孫へと、次々に引き継いでい

って代々、武内宿禰と称し、正

始八年当時の(何代目かの)武内宿禰が、帯

方郡へ使いらした、と見るべきかも知れない。

この物語では、

△武内宿禰と、戴斯鳥越(戴斯鳥越)とは

同一人物なのだろうか

と考えてみることはたい

*

とも考えられよう。

あることを隠し、自ら曰く大夫伊聲者掖邪狗
皇太子去来紗別尊は、倭の女王卑彌呼の弟で

か
● いや、うがった見方をすれば、
へ倭国からの使者として洛陽の都へ赴いた
大夫の称号でも呼ばれていたの
太子(掖邪狗)であつたといえ、
と、曰く大夫と、曰く掖邪狗(皇太子)

おいて既述
本古典文学大系、岩波書店、五五〇頁補注八
一、二参照。第十六章「大夫難升米」
に
臣、あるいは有力者という一般的意味で用
いられている。しかし初期の予水らは、すべて朝廷の重
夫などの語が、すでに崇神紀からしばしば現
「日本書紀」では、大夫・士大夫・公卿大
大夫と曰く掖邪狗

24 米 ①1237

①1248 極末

1.251

改正5行「伊邪子若子」

HL

→

ともあれ、倭国王（第二代仲哀天皇）だっ

るべき筈であつたにもかかわらず、母である

初代神功皇后の意向によつて皇太子とさ小た

卑彌呼（日御子）の弟（月読命）は、曰去來

紗別尊（応神天皇が太子であつた頃の元の

名は、伊邪子別尊という意味か、と呼はれ

曰伊邪国（宇佐国）に居住して、東国（周

防難（帯の地）を治めたのであろう。

●この曰伊邪国で統治してゐる曰若い御世

（事）の、魏志倭人伝は曰大夫伊聲者掖

邪狗、日本書紀は曰大夫伊聲者掖耶約と

書き表わした下

と解してみたい。

米

すなわち、こんなにとりともめもなく、詳

らかでないとはいえず、~~ひては~~あるが、この物

語においては、

①難升米（難登米）・難斗米は、中臣の（こ

である。

①1499

H18(2006)11.20(月)
 H30(2018)3.7(火)~3.9(4回)
 H36(2018)12.23(日)~12.24(3回)

1.252^P

「^{おと}定^まて」
 ①1249^P ②1245^P
 ③1230^P-1/2-3/2 ④1244^P-3/3

令和元(2019)5.22(木)~5.24(3回)
 令和元(2019)12.26(木)~12.28(4回)
 令和2(2020)9.2(木)~9.4(4回)
 " 3(2021)5.6(木) 1回

9/4 F 9/3
 9/3

と仮りに想定し下
 月読命のことは、伊弉子若子の意で、
 (4) 伊弉耜振邪狗は、伊弉子若子の意で、
 (3) 戴斯烏越は戴斯烏越の誤りで、武内宿禰の
 ことである。
 (2) 都市牛利は、伊都国王の血筋を引く者であ
 る。

米